

アメリカにおける保守主義の誕生とアイン・ランドの交点

藤 森 か よ こ*

要旨

筆者の目的は、ユダヤ系ロシア系アメリカ人作家・思想家であるアイン・ランドの思想の特異性（可能性と危険）を明らかにすることにある。そのためには、アメリカの保守主義とアイン・ランドの関わりを整理・確認しておく必要がある。本論は、その作業の前半部分にあたる。

アメリカ合衆国の政治理念は「自由主義」しかないということは、アメリカの政治思想研究の前提である。アメリカにおいて、いまだかつて、自由主義に真に対抗する意味での「保守党」なる政党が創立されたことはない。アメリカにおいて「保守主義」なる政治思想が意識され、政治運動として結実したのは、1930年代大不況期のニューディール（New Deal）政策の社会主義的、統制経済的政策がアメリカ国民にもたらしたアメリカ精神の変質（劣化？）と、冷戦期のソ連の台頭に対する危機感からであった。

ソ連から亡命したアイン・ランドは、プロパガンダによる「希望の国」ソ連ではない実像のソ連を知っていたので、彼女の作品が、反ニューディール、反共的なものであったのは当然であり、アメリカの保守言論陣営は、彼女の作品が発するアメリカ的価値観や自由放任資本主義に対する祝福を大いに歓迎した。しかし、それも彼女の最大の作品『肩をすくめるアトラス』が出版されるまでのことだった。彼女の思想は、アメリカの保守主義が包括できない要素を含んでいた。

キーワード：保守主義、リベラリズム、ニューディール、古典的自由主義、個人主義

1 はじめに

アイン・ランド（Ayn Rand:1905-82）は、1943年に発表した政治思想小説『水源』（*The Fountainhead*）の成功により、現代アメリカ合衆国（以下、アメリカと記す）の保守主義の重要な一角を占める作家として、認識された。少なくとも、彼女が『肩をすくめるアトラス』（*Atlas Shrugged*）を出版する1957年までは。しかし、アメリカの保守主義（Conservatism）の代表的言論雑誌である『ナショナル・レビュー』（*National Review*）は、アイン・ランドの小説『肩をすくめるアトラス』を激しく拒否し、アイン・ランドの思想も激しく否定した。これ以降、アイン・ランドは、アメリカの保守主義言論人から黙殺されることになる。

本論の最終的な目的は、アメリカの政治思想史に

におけるアイン・ランドの布置（機能）を明らかにすることにあるが、そのための作業として、アイン・ランドとアメリカの保守主義の関わりを確認する必要がある。具体的には、アイン・ランドの思想の何が、アメリカの保守主義言論人たちをしてアイン・ランドを排除させたのか、つまりアメリカの保守主義とアイン・ランドの齟齬の相を考察することが必要となる。

ただし、この問題を論じるには、アメリカにおける「保守主義」の誕生の経緯とアイン・ランドがアメリカの保守主義と決裂する前の段階の状況を確認しておかなければならない。したがって、本論の直接的な目的は、アメリカにおける「保守主義」の誕生（反動？）とアイン・ランドの交点を確認することにある。

*福山市立大学 都市経営学部

2 唯一の政治的伝統である自由主義

チャールズ・A・ビアード (Charles A. Beard) によると、憲法制定以来、アメリカには三つの政党対立の型があった。ひとつは1789年から1816年までのフェデラリスト党 (Federalists) とリパブリカン党 (Republicans) の対立である。第二に、1830年から1856年まで、ホイッグ党 (Whig) と民主党 (Democrats) の対立があった。最後に来るのが、1856年から現在にいたるまでの共和党や民主党の対立である (Beard 1928, 29)。しかし、それらの政党の思想的立場は、「アメリカ独立宣言」(*The Declaration of American Independence*) に書かれている建国の理念を逸脱するものではない。政府は、国民の「生存、自由そして幸福の追求を含む侵すべからざる権利」を守るために、国民の合意に基づいて設立されるのであって、政府が、それらの国民の権利を保障することができないならば、その政府は破棄され改定されねばならないという革命を正当化する市民政府、社会契約、自由主義、市場主義経済体制の原則は、アメリカにおいては不変であり続けた。

言うまでもなく、アメリカ合衆国は、旧世界の封建的抑圧や宗教的迫害を否定した人々が建設した国家である。したがって、「アメリカは、ロシアが歴史の自由主義の段階を飛び越えたと考えられるように、封建制度の段階を飛び越えている」(Hartz 1955. 1991,3)。アメリカの自由主義 (Liberalism) は、アメリカにおいては、大前提の自然現象であるので、アメリカの自由主義は「自然的自由主義」(Natural Liberalism) と呼ばれてしかるべきものであり、それは「アメリカ精神の性格」(the Frame of Mind) である (Hartz 1955. 1991,5)。アメリカには、イギリスや日本においてのように、封建制度の残滓である王室や貴族などの保持を国体の永続性の必要条件と考える類の「保守」はいない。その意味では、アメリカには、「革新」(radicals) しか存在しない。

もちろん、アメリカは、真空の中に市民政府を樹立したわけではない。過去を断絶して現在と未来を

構築することはできない。レオナルド・ウッズ・ラバレー (Leonard Woods Labaree) が『アメリカの保守主義の伝統』(*Conservatism in Early American History*) において記したように、旧世界の貴族制度や階級社会の秩序と安定に郷愁を感じて、革命派 (Patriots) に違和感を抱く、いわゆる、「親英派」、「トーリー気質」(Tories) の人々は、アメリカ独立革命前にも後にも存在した。彼らの存在が、ヨーロッパとアメリカの文化的紐帯を保持した。また、法と秩序に基づく政府をアメリカに打ち立てようと努めたのは、彼らの持つ「保守主義」であった。アメリカ独立革命が、後年のフランス革命に比較すれば、暴力的色彩が薄いのは、政治的手段として暴力を用いることに抵抗した彼らがいいたからであったと、ラバレーは指摘した (Labaree 1948, 169)。しかし、これらの姿勢は、「保守的な心情」「保守的な構え」ではあっても、政治思想としての「保守主義」では断じてない。

では、アメリカにおける政治思想としての「保守主義」は、なぜ生まれたのか。佐々木毅が、「近代保守主義の発生を促したのはフランス革命であった。こうした危機に直面すると、保守主義は改めて守るべき制度や原理を再確認し、それに基づいて人々を結集し、動員しようとする試みとして現れる」(佐々木, 1984, 3) と述べているように、フランス革命が、エドモンド・バーク (Edmund Burke) をして、イギリスにおいて、政治思想としての保守主義を顕現させたように、アメリカにおいても、政治思想としての「保守主義」なるものが生まれたのは、アメリカの唯一の政治的伝統である自由主義が、アメリカの原則から逸脱した1930年代から40年代にかけてのことだった。それが運動として結集したのは、1950年代のことであった。その経緯を確認する。

3 大不況にいたる経緯

第一次大戦中のヨーロッパへの輸出によって、アメリカの重工業は発展した。第一次大戦後は、同地域への輸出の増加があった。帰還兵による消費の拡

大もあった。さらに、モーターゼイションの始まりによる自動車工業の躍進があった。かくして、繁栄の1920年代が始まった。

その好景気によって、蓄積され投資先を求めた資金が、株式市場に流入した。株式売買で利益を得た話を聞きつけて、投機熱に煽られた人々により、さらに資金が株式市場に流入した。個人投資家も、信用取引により容易に借金ができるようになり、さらに投機熱は高まった。生産会社ですら、資金を株式に投下して、利益を得ようとした。連邦準備局 (Federal Reserve Board) は、過熱した投機を抑えようとしたが、ニューヨークの銀行資本は、それに抵抗し、株式下落の兆候が現れると、「組織的支持」を行い、株式の上昇を維持した。市場への政府の介入を嫌うのは、アメリカの伝統である。特に、時の共和党ハーバート・クラーク・フーバー大統領 (Herbert Clark Hoover) は、アダム・スミス以来の古典派経済学の信奉者であり、国内経済において自由放任政策をとり、投機熱の抑制などの市場介入を支持しなかった。

そのような状況のもと、1929年10月24日10時25分、ゼネラルモーターズの株価が下落した。まもなく、株式市場は売り一色となった。株価は大暴落した。400名の警官隊が出勤して警戒にあたらないければならないほどに、ウォール街は不穏な空気につつまれた。同じく、シカゴとバッファローの株式市場が閉鎖された。投機業者で自殺した者は、この日だけで11人に及んだ。この日は木曜日だったため、後に、この日は「暗黒の木曜日」 (Black Thursday) と呼ばれた。翌日には、ウォール街の大手株仲買人と銀行家たちが、買い支えを行うことで合意した。このニュースで相場は平静を取り戻したが、その効果は一時的なものだった。

週末に新聞が暴落を報じたので、28日月曜日には、株式の売りが殺到した。株価は大暴落した。その損失額は、当時の連邦年間予算の10倍に相当し、かつ、アメリカが第一次世界大戦に費やした戦費の総額をも、はるかに超えるものだった。投資家は損失を埋めるために、様々な地域・分野から資金を引き上げた。かくして、大きな景気後退が起き

た。

1930年代の大不況の発端となったこの金融恐慌の原因は、不健全な投機を可能にした金融面の無政府性だったのではあるが、真の原因は、消費財に対する需要が少なかったことだった。つまり国民の消費力、購買力が、好景気にも関わらず、生産に比例して増加していなかったことにあった。

1920年代前半には、すでにして農作物を中心に余剰が生まれていたが、ヨーロッパに輸出として振り向けたため問題は発生しなかった。しかし、20年代も後半になると、農業の機械化による過剰生産の問題が生じていた。第一次世界大戦後のヨーロッパは食糧生産に努力したため、アメリカの余剰農作物は行き場を失った。さらに異常気象があいつぎ、農業恐慌が発生した。

他の余剰消費物に関しても、第一次世界大戦の荒廃から回復していないヨーロッパ各国の購買力は、それらを吸収することはできなかった。大きな市場であるロシアは社会主義国ソ連となり、世界市場から離脱した。アメリカ国内の生産過剰の消費財は、さらに行き場を失う。国内の消費力も好景気にも関わらず、伸びなかった。国内所得総額の3分の1以上は、国民の5パーセントでしかない最上層富裕層のものであり、一般の国民に購買力はなく、消費が拡大するわけはなかった。アメリカの生産力は縮小した。つまり、企業の倒産、閉鎖、事業縮小が相次いだ。工業生産は平均で33パーセント低落した。

フーバー政権は、減税を断行し、生産の継続と賃金水準維持を財界に懇願し、若干の公共事業にも着手して、失業者の吸収に努めた。しかし、減税額は、不況から立ち直るに足る購買力を国民に与えなかったし、新しい投資を呼び込むこともできなかったし、公共事業の規模も小さかったため、効果はなかった。

1929年の時点では、失業者は155万人であったが、1933年には、失業者数は1283万人 (当時の労働人口の25パーセント!) に上った。アメリカの海外投資額の枯渇、輸入の削減は、世界各国に深刻な影響を与えた。アメリカ国内だけでも、閉鎖された銀行は1万行に及び、1933年2月にはとうと

う全銀行が業務を停止した。社会主義革命の発生すら懸念された。しかし、社会党 (Socialist Party) や社会労働党 (Socialist Labor Party) や共産党 (Communist Party) などの左翼政党は、アメリカの原則であった自由市場、資本主義体制の危機に乗じて革命を起こす力も意志もなかった。大不況にいたるまでの経緯は、以上のとおりである (Watkins 1993, 20-47/アメリカ学会 1957, 2006, 88-92)。

リチャード・ホフスタッター (Richard Hofstadter) は、建国以来からニューディールに至るまでの時代のアメリカの政治的イデオロギーの中心的信念の主要信条は、「私有財産の神聖、財産の処分・投下に関する個人の権利、機会の尊重、大綱のみを定めた法制の枠内において、利己心と自己主張が、恵み多き社会秩序へと自ずから進化していくという確信」だと、述べた (Hofstadter 1948, 1983, introduction xxxvii/田口 & 泉訳 2008, xvii)。さらに、「この信条は、政治の任務は、かかる競争的世界を擁護し、ある場合には促進することであり、そこで起こりがちな濫用に応急策をほどこすことは許せるが、計画的社会行動のもくろみによって、これを不具にしては決してならない、と主張する。アメリカにはまた平等的民主政にたいする特に強い愛着の伝統があるが、しかしそれは友愛の民主政ではなく、むしろ利欲の民主政であった」 (Hofstadter 1948, 1983, introduction xxxvii/田口 & 泉訳 2008, xviii) とも述べた。すなはち、アメリカという国家は、生存、自由そして「幸福の追求」を含む侵すべからざる権利を守るために設立されたのだから、国民が、もっともわかりやすい「幸福の追求」であるところの財の追求、私利私欲の追求に邁進することは当然であるし、それを政府が抑制介入することは考えられなかった。

建国以来、アメリカの歴史は、少なくとも20世紀に入ってしばらく経過するまでは、近代産業資本主義が勃興し発展した時期と重なったので、国民が物質的諸利益獲得という「幸福の追求」を実践し、その果実を獲得することは、比較的容易なことだった。その競争に政府の介入など全く必要としなかつ

た。しかし、1929年10月24日のニューヨーク株式市場の大暴落から始まった大恐慌は、アメリカ史上初めて政府の強力な介入を国民に待望させた。

4 ニューディール政策の三つの後遺症

恐慌の混乱の中で、1932年に修正資本主義に基づいたニューディール政策 (New Deal) を掲げ、民主党のフランクリン・デラノ・ローズヴェルト (Franklin Delano Roosevelt) が大統領に当選した。就任後に、ローズヴェルト大統領が実行した政策の主たるものは以下のとおりである。

(1) 銀行、および通貨の統制。立ち直り可能な銀行への大幅な貸し付け。救済不可能な銀行の整理。(2) 救済を予定する個人や会社に対する連邦政府からの財政的支援。(3) 「農業調整法」 (Agricultural Adjustment Act : AAA) の実施。農民の救済。農業生産の制限による需要の調節。生産制限する農民への政府からの補償金提供。(4) 産業復興のための私企業の規制。「全国産業復興法」 (National Industrial Recovery Act : NIRA) 制定。公共土木事業により雇用を確保し、国民の購買力を高める。価格を規制し、需要の調節を図る。(5) 組織労働者の組織権、団体交渉権を保障する「全国労働関係法」 (National Labor Relations Act) の制定。労働者保護の促進。(6) 社会保障制度の実施。失業保険、高齢者扶養保険、貧困層や身体障害者への扶助金制度。(7) 「テネシー河域開発局」 (Tennessee Valley Authority : TVA) 設立。発電事業への政府介入。低料金による電力供給事業実行。(8) 株式市場の過熱や大企業への投資の過剰を抑えるための「連邦有価証券法」 (The Federal Securities Act) および「有価証券取引所法」 (The Securities Exchange Act of 1934) 制定 (アメリカ学会 1957, 2006, 93-95)。

ローズヴェルト政権は、アメリカの資本主義は成人に達し、個人主義や拡張志向 (expansion) や機会の平等が謳歌する偉大なる時代は終わったのであり、今こそ放縦な経済活動に政府が秩序をもたらすべきだと考え、かつ実行したのだ (Hofstadter

1948. 1976, 430). これらの政策は、国民各層から圧倒的な支持を受けた。資本家層は、労働保護法や国家統制政策や、それに伴う官僚機構の肥大化を攻撃したし、最高裁判所は、「産業復興法」や「農業調整法」などに対して違憲判決を下したが、ローズヴェルトは、1936年の大統領選において、圧倒的支持を受けて再選された。従来の民主党支持層以外にも、北部都市居住の労働者や、それまでは伝統的に共和党を支持してきた黒人や農民の票も集めた。ニューディール政策により、都市勤労者層と農民層を中核とする新勢力が民主党支持へと結集された（アメリカ学会 1957. 2006, 93-95）。

とはいえ、ニューディール政策は、巨額の公共支出によってアメリカを支えはしたが、恐慌そのものを克服できたかどうかは疑わしかった。完全雇用が実現したのは、第二次世界大戦が始まってからであり、戦時経済による好景気によるものだったからである。日本との戦争やヨーロッパ戦線への参入がなければ、ニューディールは、結局のところは、巨大な財政赤字を残しただけだったのかもしれない。

その評価はさておき、ニューディール政策は、三つの後遺症(?)をアメリカに残した。ひとつは、「全共同体は連邦政府機関を通して大衆の福祉にある程度責任を持つという原則」が、アメリカの大衆庶民層の人々の意識のなかに確立されたことである（Hofstadter 1948. 1983, 441）。アメリカ人は、「国家権力が国民福祉の確立のために役立つことを経験した」のである（Niebuhr 1953, 57）。つまり、国家は、国民に奉仕し、国民に対して生活の保障を与えるものであるのだから、それができるくらい大きな権力を政府に付与するのはいたしかたないという見解が、国民の中に根を下ろしたのである。

ニューディール政策のふたつめの後遺症は、国家の高度な経済活動維持のためには、政府の財政投資はやむをえないという前提ができたことであろう。同時に、国民の生活の安全保障のための財政支出の恒常化という前例ができたことであろう。ローズヴェルト政権のときは、戦争による国防費という財政支出は、戦争への参加によって相殺された。戦争

は、何よりも、巨大な在庫整理機会であり、かつ巨大な消費機会である。戦争ほど需要と生産を増大させ、経済活動を昂進させるイベントはない。しかし、通常の場合は、増税という財源確保しか、もしくは債権発行による資金調達しか、政府の財政支出を可能にするものはない。本国イギリスからの「代表なき課税」に抵抗したことを発端として建国されたアメリカが、自助努力を旨として建国されたアメリカが、赤字財政を許すような巨額の公共事業支出、国民の生活への公的支援を経験したことで、社会民主主義的な高度福祉社会を是とし始めたのだ。それは、国民の自由な経済活動への規制であり、高度福祉社会形成に必要な福祉官僚の肥大化を招くものであろうとも。

つまり、ニューディールは、アメリカの伝統的な本流からはずれた政策だった。建国以来、アメリカ人の心に根を下ろしていた「自助と自由企業と競争と社会に恩恵を与える個人の貪欲さというイデオロギー」（the ideology of self-help, free enterprise, competition, and beneficent cupidity）が、社会主義に限りなく似たものに取り替えられつつあった（Hofstadter 1948. 1983, introduction xxxvi）。これらふたつのニューディール政策の後遺症が、三つめの後遺症を生んだ。つまり「保守主義」の誕生である。

5 アメリカにおける保守主義の誕生

現代アメリカにおける保守主義という思想は、まずは、組織化されない多様な個人の集まりから発展した。のちに保守主義者と呼ばれることになる、これらの人々は、リバータリアン（libertarian）や農本主義者（agrarian）や個人主義者（individualist）や国家主義者（nationalist）などであった。明確に自己定義した保守主義運動は、第二次世界大戦前には存在しなかったし、これらの人々は、自分たちのエネルギーの焦点をどこに置くべきかはっきりとはわかっていなかったのだが、ローズヴェルト政権とニューディール政策に対して大きな脅威を感じるという点においては共通していた。限定された政府や

権力の分立というアメリカ憲法に定められた原則を無視するローズヴェルト政権の権力の集中や中央集権国家のあり方は、ソ連やナチ・ドイツを彼らに想起させた (Schneider 2003, 5).

保守主義者たちは、政権に対すると同時に、アメリカ国民同胞に対しても脅威を感じた。彼らは、「アメリカ人」とは、政府に対して国民の生存と自由と幸福を追求する権利を保障することのみを期待して、アメリカ合衆国を立ち上げた人々の末裔だと自らを定義する人々のことだと考えていた。彼らが考える「アメリカ人」の幸福の追求とは、国家に生活保障を求めることを意味してはなかった。しかし、彼らが考える「アメリカ人」は、どこにもいない幻であるか、少数派であるようだった。彼らが生きる時代は、すでにして大衆民主主義 (mass democracy) の時代であり、偉大さを求めない「凡人」 (common man) の時代であった (Schneider 2003, 5)。今や、アメリカ人は、国家に保護を求め、共同体に自らを委託する集団主義者であり、自らの生き方を貪欲に追及する独立独歩の個人主義者ではないのだった。アメリカ人にとっては、政府とは、必要悪ではあるが便宜上設立した機構だったはずなのに、今や、その政府に保護され飼育されることを望む「国畜」に、多くのアメリカ人はなりたがっていた。政府は、国民の生活を保障するという大義名分のもとに、巨大な官僚機構を通じて、国民生活への介入規制を始めるに違いないのに、一般大衆にはその危険がわからないようだった。

彼ら保守主義者たちにとっては、ローズヴェルト政権は、アメリカをソ連やナチ・ドイツと同じにする危険な国家主義者、全体主義者であり、ニューディールは、アメリカの原則を生きるにふさわしい人間を育むことを拒否するアメリカ人劣化政策であったのだが、とはいえ、彼ら保守主義者たちは、自分たちの抵抗を運動として組織化することはできなかった。

彼らが、ある程度結集するきっかけになったのは、1944年にイギリスで出版され、アメリカでは1945年にシカゴ大学から出版されたフリードリッヒ・A・ハイエク (Friedrich A. Hayek) の著書

『隷属への道』 (*The Road to Serfdom*) だった。ハイエクは、オーストリア人経済学者で、当時はイギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (London School of Economics and Political Science) で教鞭をとっていたが、計画経済政策は、結局は独裁体制をもたらし、必然的に国民の自主独立を抑圧すると主張した。さらに、自由な社会における個人の持つべき美徳として、自立心 (independence) と独立独歩 (self-reliance) と個人の創意 (individual initiative) と地域共同体への責任 (local responsibility) と権力や当局に対する健全な猜疑心 (a healthy suspicion of power and authority) を挙げた。しかし、ハイエクは、独善的な自由競争主義 (dogmatic *laissez faire* attitude) の信奉者ではなく、政府機関の役割も重視した。アメリカとアメリカ人を危惧する心は同じであるが、未組織であったところの、のちに保守主義者として呼ばれる人々は、自らの立場を説明する言葉を、『隷属への道』によって得た。この本は、現代アメリカの保守主義運動を最初に定義づけた哲学書となった (Edwards 2004, 3)。

さらに、この本は、当時900万部の発行部数を誇った『リーダーズ・ダイジェスト』 (*Readers Digest*) 誌が要約版を発行したことにより、アメリカの一般大衆にも大きな影響を与えた (Edwards 2004, 3)。『隷属への道』の成功は、ニューディールの社会民主主義的政策に反対する商工会議所や広告代理店や大企業が組織的に販売し広めたことによるものであって、それが伝える思想の力によってではないというリベラル左派系言論誌の『ニュー・リパブリック』 (*New Republic*) 誌からの批判中傷もあった。しかし、後に、同じ左派系言論誌の『コメンタリー』 (*Commentary*) が、ハイエクの『隷属への道』は、「アメリカにおける知識人の歴史に残る大事件」 (a major event in the intellectual history of the United States) であったと述べ、『ニュー・リパブリック』の中傷を廃した (Edwards 2004, 3)。

このように、アメリカの保守主義は、ハイエクの古典的自由主義 (classical liberalism) を思想的基

盤にしたという意味で、決して、新しい「政治思想」ではない。「先祖返り」、あるいは、「反動的な精神」に見えるかもしれない。前述のホーフスタッターが述べたところの、建国以来のアメリカ人の心に根差した「自助と自由企業と競争と社会に恩恵を与える個人の貪欲さというイデオロギー」(the ideology of self-help, free enterprise, competition, and beneficent cupidity)によってでは、より広範囲の大衆を失業と貧困から解放することができなかったからこそ、ニューディールがあったという事実への考察や反省がないように見える。少なくとも、ニューディール政策を必要とした状況への対処を含む新しいイデオロギーを構築し提示するようなものではないように見える。だから、ラインホルト・ニーバー(Reinhold Niebuhr)がこう述べるのも無理はなかった。

かくして、アメリカは政治史上、いわゆる「保守主義者達」が保守主義的と呼ばれる所似のものは、彼らが変改に反対し、現状維持を擁護している点においてのみなのである。そして、この現状維持ということは、ローズヴェルトの登場までは、経済に対する国家の干渉を意味し、その結果アメリカは自由放任主義の信奉者達の天国と化さざるをえなかったのである。つまり実業界は、明らかにイデオロギー的な理由から、自由主義の信条の中、もっぱら重農主義やアダム・スミスの流れをくむ面、すなわち、特に経済の分野においては人間の自発性を国家の統制から最大限に解放せんとする面を擁護しようとしたのである。この種の自由主義は、不幸にして、人間の欲望は凡て経済的な野心なりと考え、人間の野心はすべて本質的には合目的なものゆえ、結局は市場において自動的に調整され均衡され得るものと誤解したのである。この種の自由主義は、特に実業界に共感を呼ぶものである。けだし、一つには、それは政治権力による干渉から、経済力を保護してく

れるからである。二つは、実業人に特有な幻想とびつたりするからである。すなわち、彼ら実業人は権力関係の複雑怪奇さを知らず、政治の世界においては、危険なままで非合理的な野心が力をふるい、殊に政治的宗教の時代にあっては、悪魔的な政治運動をもたらすことをわきまえないのである。(Niebuhr 1953, 59-60/アメリカ学会, 1957. 2006, 678-79)

ニーバーは、この文章において、アメリカの保守主義の持つ、人間存在への経済還元主義的姿勢や、経済的合理性を無視して動く政治闘争への警戒心のなさについて警告を発している。世界や人間を、合理的な損得計算によって動くものと考えすることは、人間性の根幹にある不合理な権力欲や情動の悪魔性を軽視することによって、大きな悪を、自己にも政治にも許してしまうと、ニーバーは考えている。世界や人間は、ビジネスマンが考えるほどに、損得という合理性で動いているのではないというわけである。その例こそがナチス・ドイツでありソ連の体制であると、ニーバーは示唆しているのだが、しかし、ドイツにおけるナチスの台頭やロシア革命の根本原因は経済的不平等、経済的困難の克服の失敗であった。つまり、経済活動の失敗なのであった。だから、アメリカの保守主義の経済還元主義的姿勢を批判するのは、間違っているのではないか。逆説的には、より一層の徹底した経済還元主義の欠如が、政治的不安定や空白を生み、人間性の不合理や悪魔性を誘発すると考えられるのではないか。しかし、この問題をさらに追及する紙幅は、本論にはない。

ともあれ、1940年代や50年代のアメリカの保守主義者たちの中には、単なる先祖返りや反動でなく、アメリカの建国の精神であった古典的自由主義の意義を、現代だからこそ必要とされるその革新性を、あらためて分節化しようと試みた人々もいた。そのひとりが、アイン・ランドだった。

6 アイン・ランドについて

アイン・ランドは、まだまだ日本では未知の作家であるので、ここで、彼女の生涯を素描する。アイン・ランドの本名は、アリサ・ジノヴィエヴナ・ローゼンバウム（Alissa Zinovievna Rosenbaum）である。第一次ロシア革命勃発の1905年に、当時のロシアの首都サンクト・ペテルブルク（ソ連崩壊前のレニングラード）のユダヤ系ブルジョア階級の家庭の三人姉妹の長女として生まれた。父は、ユダヤ人は一定の割合しか大学入学が許可されなかった時代に、ポーランドのワルシャワ大学で化学を学び大きな薬局を経営していた。1917年の第二次ロシア革命、18年のロシア共産党発足を経て、19年の十月革命後に、父の薬局は国営化された。ランドの一家は困窮し辛酸をなめる。ランドは、歴史を専攻し哲学を好んで学んだサンクト・ペテルブルク大学（ソ連崩壊前のレニングラード大）を25年に卒業した（革命後、大学の授業料は無料となったので、大学で勉学することはできた）。その後、映画学校に入りシナリオについて勉強する。しかし革命後のロシアの混乱、統制、貧困、自由剥奪、個人の尊厳の無視と抑圧に苦しんだランドは、アメリカに夢を賭けることにする。アメリカ行きは、長女の言動に危機を感じた母親の勧めでもあった。ランドは、シカゴに移住した親類を訪問するという理由で念願のパスポートを手に入れる。

1926年に、ランドはニューヨークに上陸する。この時、アメリカ風にアイン・ランドと改名した。シカゴの親類宅にしばらく厄介になり、そのままランドはアメリカに留まる。両親も承知のうえの、最初から亡命するつもりでソ連出国とアメリカ入国であった。わずかな所持金とタイプライター以外に、手荷物も少ない移民としての貧しい暮らしが始まった。英語もろくに話せないまま、新開売りや給仕や店員など職を転々とする。英語の勉強を兼ねての映画館通いが慰めであり、当初の希望通り、シナリオ作家になりたくてハリウッドへ移る。ランドは、21歳で英語を学び始めて、英語を使用してのプロのライターになるうとしたのだ。当時のハリ

ウッド三大監督の一人セシル・B・デミル（Cecil B. DeMille）と知りあい、エキストラの職を得て、映画会社の衣装係となり、1年後には衣装担当マネージャーとなる。1929年には無名の男優フランク・オコーナー（Frank O'Connor）と結婚する。延長に延長を重ねてきたビザの更新がこれ以上できず、不法滞在という状態を避けるための手段でもあった。ランドは、31年に晴れてアメリカ合衆国の市民権を獲得する。

1934年に彼女の初の劇作品『ペントハウスの伝説』（*Penthouse Legend*／原題は*Woman on Trial*／後に*Night of January 16th*と改題される）が、ハリウッドで上演された。35年にはブロードウェイで上演されることになり、これを契機にランド夫妻はニューヨークに移る。この劇は半年間上演され、ランドは少し注目を浴びた。また、ロシアでの自らの苦難の青春時代を題材にしたシナリオを書いた。その中から、36年に『我ら、生きるもの』（*We the Living*）という小説がうまれた。それは革命期の混乱し腐敗したロシアから自由を求めて単身、国境を超えようと試みて銃殺されるヒロインを描いたものだったが、当時のアメリカの政治的空気はこのテーマは即さず、評判になることはなかった。相変わらず、ランドの生活は経済的に苦しいものであった。

その生活が、7年がかりで執筆し43年に出版された『水源』（*The Fountainhead*）によって激変した。この小説は、12の出版社から断られた末の出版であり、まともな宣伝もされなかったし、戦時中の物資不足、用紙不足により、絶版の憂き目も見たが、ロコミで読まれ売れ続けた。ついには映画化の申し出も受けて、ランドは莫大な映画化権料を手にした。映画化のシナリオ執筆も要請されたランドはニューヨークから離れ、再びハリウッドに移り、ロス・アンジェルス郊外に、有名建築家の設計による邸宅と牧場を手に入れる。生活が安定した彼女は、ロシアから家族を呼ぼうとしたが果たせなかった。両親は第二次大戦後に死亡した。結局、ランドは1982年に亡くなるまでの生涯、祖国にはついに帰らなかった。

その後は映画のシナリオ（*Love Letters, You Came*

Alongなどを精力的に書き、46年には『讃歌』(Anthem)を発表する。49年にゲーリー・クーバー(Gary Cooper)主演の*The Fountainhead*の映画化作品(邦題は『摩天楼』)が上演され、原作は再び脚光を浴びる。しかし彼女の文名を決定的にしたのは、執筆に14年間を費やし、57年に出版された大長編『肩をすくめるアトラス』(*Atlas Shrugged*)である。この作品こそが、アメリカの保守主義とアイン・ランドを決裂させた問題作であるのだが、本論の続編において詳しく論じられることになるので、これ以上の記述は、ここでは避けておきたい。

ランドは、『肩をすくめるアトラス』以降は、小説は書かず、自らの思想「客観主義」(Objectivism)を整理し深める論文が著述の中心となった。主なものに、61年の『新しい知識人のために---アイン・ランドの哲学』(*For the New Intellectual: the Philosophy of Ayn Rand*)、64年の『利己主義という気概』(*The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*)、67年の『資本主義一知られざる理想』(*Capitalism: The Unknown Ideal*)、71年の『新左翼一反産業革命』(*The New Left: The Anti-Industrial Revolution*)がある。これらの著作は若い読者に熱狂的に受け入れられ、「ランド教徒」(Rand Cult)と揶揄されるような信奉者たちが彼女を取り囲んだ。

その中には、フォード政権の経済諮問委員会議長を努め、連邦準備理事会(Federal Reserve Board/FRB)理事長としてアメリカの経済政策の重鎮であり続けたアラン・グリーンズパン(Alan Greenspan)もいた。オーストリア経済学の重鎮であったマーレー・N・ロスバード(Murray N. Rothbard)も、そのひとりであった。現在でもランド思想の民間研究機関はいくつかある。ランドの遺稿管理者であり著作権所有者のレオナルド・ペイコフ(Leonard Peikoff)率いるカリフォルニアの「アイン・ランド研究所」(The Ayn Rand Institute)に、ランドの思想の源流とされるアリストテレス哲学の研究者アラン・ゴットヘルフ(Alan Gotthelf)が会長を努めるニュージャージー大学が本拠地であ

る「アイン・ランド協会」(The Ayn Rand Society)がある。この学会は、アメリカ哲学学会の分科会でもある。また、先のブランデンやデビッド・ケリー(David Kelly)の「客観主義研究所」(The Objectivist Center)がニューヨーク郊外のポーキプシーにある。リバータリアニズム系政治思想誌『自由』(*Liberty*)ともつながる「アイン・ランド研究誌財団」(The Journal of Ayn Rand Studies Foundation)がワシントンD.C.にある。

ともあれ、こう書くとロシア亡命移民からたたきあげたユダヤ系女性大衆思想家の硬派な顔が想像されるが、ランドの実人生は、当然のことながら彼女の小説世界の主人公たちや、彼女が構築した思想ほどには、合理的ではない。ランドの死後の文名を汚したのは、彼女の信奉者であり弟子であった25歳年下のブランデンとの14年間にわたる不倫関係に関するスキャンダルであった。ランドは、夫であるフランク・オコーナーの美男ぶりから小説のインスピレーションを受けてはいたし、夫の温厚さ、忍耐強さに生涯支えられた。しかし、芸術的天分に恵まれ、晩年には画家となった夫は、ランドの思想や小説に描かれる主人公のような社会的成功は手にしなかった。生涯職業的には成功せず、生活の収入は妻のランドに依存していた。ランドは、こうした夫に飽き足らなかったのか、夫やブランデンの妻に堂々と宣言して、納得(?)させて、ブランデンとの関係を始めた。夫が愛するカリフォルニアの牧場や自宅も売って、ニューヨークに再び居を移したのも、理由はブランデンだったという。

しかし、理由はそれだけではなかったのではない。ピョートル大帝がヨーロッパ中を旅して、自ら建築から製図、大工仕事まで学びながら、何万人もの農奴を酷使して、北の湿地帯に構築した壮麗な都に生まれて育ったアイン・ランドにとっては、カリフォルニアは、あまりに「田舎」であったのではないか。傑出したロシア皇帝が大きな構想のもとに構築した都であるサンクト・ペテルブルクと、マンハッタンは、都市の本質が非常に似ている。アイン・ランドは、ニューヨークの摩天楼の風景の向こうに、生れ故郷の壮麗なる都、サンクト・ペテルブル

クを、常に幻視していたのではないか。これは、筆者が、ランドの生れ故郷のロシアはサンクト・ペテルブルクを2度訪れて感じたことである。

ブランデンとの不倫関係は約14年間継続された。このいきさつと破滅の結果と当事者たちの葛藤については、(当時の)ブランデンの妻バーバラ(Barbara Branden)がランドの死から4年後に出版した『アイン・ランドの受難』(*The Passion of Ayn Rand*)に記述されている。これは、ランドの人生と作品生産にまつわる事実と、人間関係を詳細に記録し整理した、初の本格的ランド評伝である。これを元に、同名のテレビ映画が2000年に製作され、エミー賞を受賞した。ビデオ化、DVD化もされた。それに対抗するかのようにはバーバラ・ブランデンの元夫のナサニエル・ブランデンも、ランドとの経緯を『裁きの日---アイン・ランドとの年月』(*Judgement Day: My Years with Ayn Rand*)と題して、89年に発表した。99年には改題してその改訂版(*My Years with Ayn Rand*)も出版した。

人間の理性を寿いだアイン・ランドの不合理きわまりない不倫騒動が、ランドの死後に暴露されたとしても、彼女の作品そのものの価値や、彼女の提唱した思想そのものの考察の価値が無効になるわけではない。しかし、アイン・ランドといえば、未だに弟子との不倫が面白おかしく語られるというのは、実に幼稚な現象だと筆者は思う。男性作家ならば、若い女性の信奉者や弟子との恋愛騒ぎなど、問題にもならないが、女性作家であると、その作品の価値すら貶められるようなスキャンダルになるという点に、まだまだ男性と女性の間にある評価基準の非対称性、つまりジェンダーの問題が関与している。しかし、この問題は、本論の趣旨とははずれるので、これ以上は言及しない。

1972年に、ランドは、ソ連に住んでいた末の妹のノラを、やっとアメリカに呼ぶことができた。ランドは、妹夫妻をアメリカに永住させるつもりであったのだが、妹夫婦は自由なアメリカの選択肢の多さになじめず、ソ連に戻ってしまった。75年にランドは肺ガンを宣告される。手術そのものは成功したがその後の健康状態は思わしくなく、夫の死後3

年を経過した82年に、マンハッタンの自宅において、77歳で亡くなった。圭角の激しさから多くの友人知人と絶交してきたランドに最後まで忠実だった弟子のペイコフが、ランドの著作・遺稿版權所持者となり、現在にいたっている。ペイコフは、彼女が新聞に掲載したコラムや、手紙や日記を整理して出版している。彼女の生涯を題材に、ドキュメンタリー・フィルム『生の感覚』(*Ayn Rand: A Sense of Life*)が製作されたが、これは96年のアカデミー賞のドキュメンタリー・フィルム部門にノミネートされた。また、何度も何度も試みられつつ映画化されなかったのだが、やっと2011年4月に、『肩をすくめるアトラス 第1部』の映画化(*Atlas Shrugged Part 1*)が実現した。いかにもいかにもの低予算映画であるので、アイン・ランドの愛読者の多くにとっては、不満の残る映画化ではあるのだが、小説の映画化作品が、原作に勝ることはめったにないのであるから、それもいたしかたないであろう。

7 『水源』について

アイン・ランドが、ソ連から亡命し、無名の映画シナリオ作家としてハリウッドで苦闘していたのは、主に1930年代、つまり「赤い十年」(*The Red Decade*)だった。資本主義経済への幻滅から労働運動が全米を圧巻し、社会主義が現状打破の思想として期待され、ソ連に熱い目が注がれた時代である。前述したように、時のローズヴェルト政権も、大不況失業対策のために資本主義の原則からはずれたニューディール政策を採用し、敵対勢力からその政策の違憲性を問われたほどに、時代は社会主義礼讃が風潮だった。スターリンによる反スターリン派大弾圧(逮捕者250万人、処刑68万人、獄死16万人の粛清であった)を見ることはなかったにせよ、ソ連の現実を知っていたランドにとっては、アメリカの30年代の「赤い空気」は苛立たしいものだった。

その「赤い時代」に書き続けられて、1943年に発表された小説が、『水源』(*The Fountainhead*)である。1922年から1930年代末までの18年間ほどの

ニューヨークを舞台にはいるが、具体的な政権の名とか、当時の有名人などの固有名詞はいっさい言及されていない。しかし、ローズヴェルト大統領が設置させた画家や音楽家、舞踊家、俳優、作家などの、（本来ならば創造者として何ものからも解放された独立独歩な存在を志向するはずの）芸術家救済機関である「市民芸術部局」（Civil Works Administration: CWA）をパロディにした団体が登場する。ニューディールお得意の公共事業を嘲笑するようなエピソードも描かれている。この小説が、ニューディール時代への風刺でもあることは明白である（Szalay 2000, 78-87）。

物語内容は、以下のようなものである。1922年の初夏、主人公ハワード・ローク（Howard Roark）は建設工事現場労働者をしてながら建築家めざして苦学しながら通っていたマサチューセッツ州にあるスタントン工科大学を退学になる。学業成績は優秀だが、大学で教えられる建築学に異をとらえたことから教授陣の怒りを買った。ローマ時代やルネサンス時代などの古典建築を現代風にするだけの建築学に彼は満足できない。その建築物の機能を最大限に活かすデザインと建築法と素材を妥協なく彼は求める。彼の生き方は、個人主義的であり、自己中心的であり、神を恐れぬほどに人間の可能性を信じていると、批判される。

確かに、ロークは神を信じていない。ロークは、世界をここまで構築してきた人間の理性を信じている。人間の非力を嘆かない。原始状態から摩天楼のような華麗壮大な事物を現前させたのは、大海原を航海する船や大空を渡る飛行機を造ったのは、神でも自然でもなく、人間の知恵と力だ。だから、ロークは、人間の歴史を肯定する。ロークは、地球にある事物をより良く美しく変えたいと思う。だから建築家になった。ロークは考える。人間の生命を燃え立たせるのは、より良く生きたいという人間の欲望だ。その欲望こそが人間を奮起させ社会を推進してきた。他者への貢献は、その自己肯定的な自己中心的欲望の達成の派生物でしかない。他者への奉仕そのものは目的ではない。無私無欲の利他主義は美德ではない。無私無欲では何も産みださない。世間一

般で言う利他主義とは、他人の「より良く生きたい欲望」の成果をただで掠め取りたい怠惰で無能な寄生虫の自己弁護の思想である。もしくは、何かを生み出せる自分を持っている人間に対して、自分自身の中から湧き上がるもののない空虚な人間が抱く嫉妬の思想である。

ロークは思う。そうした個人の「自分が選んだより良い人生を生きたい」という欲望と、その実践を抑圧する社会体制、つまり個人の選択の自由を認めない社会体制は愚劣であり邪悪である、と。個人主義は、集団主義より道徳的に優位である。自由主義は、社会主義や共産主義や全体主義より道徳的に優位である。自己中心主義は、利他主義より道徳的に優位である。自由放任主義は、計画経済や統制経済や保護経済より道徳的に優位である、と。

伝統的美徳である利他主義や人間の自然に対する卑下を否定するロークの理解者は少ない。それでもロークは、志を同じくする友や、彼の設計を認める顧客に出会いながら、建築界に足場を築いていく。しかし、彼の進出を絶対に許すことができないと考える人物が、彼の前に立ちちはだかる。それは、エルスワース・トゥーイー（Ellsworth Toohey）である。彼は建築史の研究者でありかつ指導的知識人である。世評を左右できるオピニオン・リーダーである。トゥーイーは資本主義的な自由競争社会を否定し、競争や闘争のない平和な利他的共同社会、福祉社会を提唱し、かつ実践しようとする社会改革家でもある。

しかし、彼の「一見非のうちどころのない高邁な弱者救済や公共の福祉の完全実現を唱える思想は、人間愛から生まれたものではなく、支配欲、権力欲の産物だった。なぜ、トゥーイーは、人間が自己をなくし他人のために生きることが理想の生き方であり、利他的生き方がもっと徹底されれば社会悪も消えると唱えるのか。実は、そのようなことは、トゥーイー自身信じていないのに。なぜならば、世間や他人との協調のために自分を否定して自分を見失う人間が増えれば増えるほど、管理と支配がしやすいからである。トゥーイーの行動や提唱は、伝統的な宗教や道徳からも支持できるものであり、誰も非難

できない正義であるので攻撃や批判を受けることもない。人々には彼の高潔な知識人の仮面に隠された人間蔑視と野心がわからない。トゥーイーは、その徹底した確信犯的偽善を駆使して、人々の「善意」に訴え、人々を意のままにあやつる。トゥーイーが構築し支配しようとする共同的な利他的な福祉的社会は独りでは立てない相互依存の人間たちによって成立する。だから、ロークのような自立した人間は邪魔になる。突出した才能の人間は、悪平等主義の協調的共同社会では邪魔なので排除しなければならない。そのために社会が進歩しなくても活力が消えても構わない。大多数の愚かな弱い人間で成立するのが社会なのだから、社会は進歩しなくてもいい。進歩には厳しい競争、弱肉強食の闘争がつきものなのだ。進歩や競争は敗者を作るから悪なのだ。トゥーイーの執拗で陰湿なローク迫害には彼なりの大義名分があった。

この小説のクライマックスは、政府による建設工事中の大規模な公共住宅高層ビル（プロジェクト）をロークが爆破する事件である。そのプロジェクトは、学生時代からロークの設計案を真似し盗用しながら大物建築家として成功してきたピーター・キーティング（Peter Keating）の経営する建築設計事務所が請け負ったのだが、設計したのはロークだった。彼は、「すべて僕の設計案どおりに建築する」という条件で、自分の設計案をキーティングに渡した。彼にとって名声はどうでもいい。自分の仕事が現実に生かされれば、それでいい。しかし、彼の案は、行政の集団主義のせいで、税金の浪費でしかないものに改悪されてしまった。だから、ロークは、建設途中のプロジェクトを爆破した。

裁判で、弁護人もつけずに、ロークはプロジェクトを破壊した理由を語る。優れた個人の才能から生まれた最高の設計を、妥協から劣化させることの弊害を語る。安易な調和を優先させる集団主義が、いかに社会を停滞させるか冷静に語る。陪審員は、彼を無罪とした。その陪審員たちこそ、弁護士をつけないロークが自身で選んだ人々だった。彼は「いい人」「優しい人」は選ばなかった。わざと、手厳しい手ごわい人々、独立独歩で生きて来たであろう

人々を選んだ。なんとなれば、ロークの思想は、単なる「いい人」や「優しい人」では理解できないから。

8 アイン・ランドと保守主義の交点

このように、『水源』は、集団主義、社会主義、利他主義を「悪」として、個人主義、資本主義、利己主義を「善」として描いた、寓話的な政治思想小説である。前述の佐々木毅は、第二次世界大戦後の保守主義の興隆の最初の段階を、「40年代後半から50年代にかけての共産主義やソビエト圏の拡大と、いわゆる冷戦状態が生まれたのに対応する動き」だと指摘している（佐々木1984, 3）。したがって、「自由市場競争の資本主義国アメリカと計画統制経済の社会主義国ソ連の対立を、人間の魂という領域に変換」（藤森 2001, 114）し、「いかにソ連の世界進出が目を見はるようなものであろうと、アメリカのシステムが正しいのだと、ロークのような英雄を排除することになるシステムには大義もないし勝利もないと読者に語りかけた」（藤森 2001, 115）この小説を書いたアイン・ランドを、アメリカの保守主義言論界が歓迎したのは当然だった。

早々と、1955年に、アメリカの保守主義の台頭の諸相を、比較的肯定的に論じたクリントン・ロシター（Clinton Rossiter）は、ローズヴェルト政権やアイゼンハワー政権の時代における集団主義的空気の中かで、「右勢力」（Right）に属する若者たちに人気を博した『水源』に描かれた個人主義の輝きについて言及している（Rossiter 1955, 169）。

また、1940年代から50年代の保守主義運動の旗手のひとりでもあったフランク・チョドロフ（Frank Chodorov）は、毎月彼個人が出版していた4ページの小冊子『分析』（*analysis*）において、推薦図書として、アイン・ランドの中編小説『讃歌』（*Anthem*）を読者に勧めた（Nash 1976, 2006, 22）。

チョドロフは、共和党内の派閥である「オールド・ライト」（Old Right）のメンバーであった。こ

の派閥は、ニューディール政策と、（実は、ローズヴェルト大統領が強く望んでいたところの）ヨーロッパの大戦へのアメリカ参入には断固反対していた。アイン・ランドも、一時期ではあるが、この「オールド・ライト」の一員であった。チョドロフは、1952年に、『所得税---すべての悪の根源』(The Income Tax : Root of All Evil) や『ひとりばりは群衆---ある個人主義者の省察』(One is Crowd : Reflections of an Individualist) を発表した。これらの著作の表題が示すように、彼はリバータリアンでもあった。のちに、アイン・ランドの周りに結集した人々のひとりでもあり、かつオーストリア経済学研究者でもあるマーレイ・ロスバード (Murray N. Rothbard) と親交を深めた。1953年には、1955年に保守主義言論誌『ナショナル・レビュー』(National Review) を創刊するウィリアム・F・バックレイ・ジュニア (William F. Buckley, Jr) とともに、「個人主義者大学連合協会」(Intercollegiate Society of Individualists : ISI) を結成し、個人主義者の大学生たちのネットワークを創設した (Edwards 2004, 19)。

この個人主義者のリバータリアンであるチョドロフが推薦した『讃歌』は、先の『水源』と同時期に執筆されたものであり、そのテーマも共通している。舞台は、近未来の暗黒社会というサイエンス・フィクションである。主人公は、大戦争か大崩壊を経過した近未来の全体主義体制の社会に生まれる。生まれてからずっと集団保育で育ち、学習内容も、仕事も、生殖再生産用の婚姻相手も、すべて「評議会」が決定する社会である。個人は社会のため全体のために存在するのであるから、「私」という一人称は、この世界には存在しない。「私は」と言うかわりに、「私たちは」と言うのが、主人公が生きる社会である。この主人公は、崩壊した過去の文明の残滓を発見したことから、実は過去の文明の方がはるかに進歩していたことを知り、自分が属する社会の暗黒性に気がついてしまう。そこから彼の暗黒社会からの脱出と新世界構築への試みが始まる。物語は、最後に主人公と、彼とともに逃亡した少女が、「私」という一人称を獲得することで終わる。

ところで、アイン・ランドは、執筆や生活費を稼ぐための映画会社のシナリオ書きだけに従事していたわけではなく、実際の政治運動にも関与していた。1940年には、共和党のウェンデル・ウィルキー (Wendell Willkie) の大統領選活動には、夫とともにボランティアで参加して、初めて、公衆の前で政治的演説をするという体験もした (Britting 2004, 57)。それが縁で、リバータリアンであるヘンリー・ハズリット (Henry Hazlitt) 夫妻と知り合い、新古典自由主義経済オーストリア経済学派の研究者ルドヴィヒ・フォン・ミーゼス (Ludwig von Mises) を紹介された (Burns 2009, 114)。ハリウッドで働いていた頃には、当時のハリウッド映画のソ連賛美の潮流に抵抗し、反共組織である「アメリカの理想を保持する映画連盟」(Motion Picture Alliance for the Preservation of American Ideals) に参加した。だから、後の47年に、ランドは非米活動委員会 (House Un-American Activities Committee) において、1944年に発表されたMGM映画『ロシアの歌』(Song of Russia) の製作にまつわる虚偽を証言した (Mayhew 2005, 179-89)。この映画は、現実のソ連社会の過酷さを見ずに美化して描いたものだったからである。他にも、ランドは、反共作家連合である「アメリカ作家協会」(American Writers Association) にも加入した (Burns 2009, 100-01, 123)。

以上のような経緯で、アイン・ランドはアメリカの保守言論界に、確固とした一角を占めることになった。その彼女が、保守言論陣営と決別した直接の原因は、1957年に発表した『肩をすくめるアトラス』に対する彼らの過酷な書評だった。そのことについては、次の機会に論じる。

参考文献

- Beard, Charles A. *The American Party Battle*. 1928.
C・A・ピアード著, 斎藤眞, 有賀貞訳著『アメリカ政党史』東京大学出版会, 1968.1998.
- Bell, Daniel., ed. *The New American Right*. New York : Criterion Book, 1955.
- Branden, Barbara. *The Passion of Ayn Rand*. 1986.
- Branden, Nathaniel. *My Years with Ayn Rand*. San Francisco : Jossey-Bass Publishers, 1999.
- Britting, Jeff. *Ayn Rand*. New York : Overlook Duckworth, 2004.
- Buckley Jr, William F. *God and Man at Yale*. 1952. Washington, DC : Regnery Gateway, 2002.
- Burns, Jennifr. *Goddess of the Market: Any Rand and the American Right*. New York : Oxford University Press, 2009.
- Cecil, Lord Hugh. *Conservatism*. Home University Library, 1912. ヒュー・セシル著 柴田卓弘訳『保守主義とは何か』早稲田大学出版部 1979.
- Deutsch, Kenneth L and Ethan Fishman., ed. *The Dilemmas of American Conservatism*. Lexington: The University Press of Kentucky, 2010.
- Edwards, Lee. *A Brief History of the Modern American Conservative Movement*. Washington, D.C : The Heritage Foundation, 2004. リー・エドワーズ著 渡邊稔『現代アメリカ保守主義運動少史』明成社, 2008.
- Goldwater, Barry M. *The Conscience of a Conservative*. BN Publishing, 2007.
- Hartz, Louis. *The Liberal Tradition in America* 1955. New York : A Harvest Book,1991. ルイス・ハーツ著有賀貞訳『アメリカ自由主義の伝統』講談社, 1994.
- Heller, Anne C. *Any Rand and the World She Made*. New York : Man A Talese, Doubleday, 2009.
- Hofstadter, Richard. *The American Political Tradition and the Man Who Made It*: 1948. Vintage.: 1983. リチャード・ホフスタッター著田口富久治, 泉昌一訳『アメリカの政治的伝統--その形成者たち』1&2 岩波書店, 2008.
- *The Paranoid Style in American Politics*. 1952. New York : Vintage. 2008.
- Kirk, Russell. *The Conservative Mind : From Burke to Eliot*. 1953. Washington, D.C.: Regenery Gateway, 1985.
- Labaree, Leonard Woods, *Conservatism in Early American History*. 1948. レオナルド・ウッズ・ラバレー著 久保芳和訳『アメリカ保守主義の伝統』未来社, 1964.
- Mayhew, Robert. *Ayn Rand and Song of Russia : Communism and Anti-Communism in 1940s Hollywood*. Lanham : Acarecrow Press, 2005.
- Nash, George H. *The Conservative Intellectual Movement in America Since 1945*. 1976. Wimington : ISI Books : 2006.
- Niebuhr, Reinhold. *Christian Realism and Political Problems*. London : Faber & Faber Limited, 1953.
- Rand, Ayn. *We the Living*. New York : Macmillan, 1936. New York : New American Library. 1996.
- *Night of January 16th*. New York : Longman, Green, 1936. Paperback : New York : World Publishing Co., 1968. New York : New American Library, 1971. New York : Plume, 1987.
- *The Fountainhead*. Indianapolis : Bobbs-Merrill, 1943. NewYork : New American Library, 1993. アイン・ランド著, 藤森かよこ訳『水源』ビジネス社, 2004.
- *Anthem*. Los Angeles : Pampheteers, Inc., 1946. New York : New American Library, 1995.
- *Atlas Shrugged*. New York: Random House, 1957. New York : New American Library, 1992. アイン・ランド著, 脇坂あゆみ訳『肩をすくめるアトラス』ビジネス社, 2004.
- *The Early Ayn Rand : A Selection from Her Unpublished Fiction*. Ed. Leonard Peikoff. New York: New American Library, 1984.
- *For the New Intellectual : The Philosophy of Ayn*

- Rand. New York : New American Library, 1961.
- The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*. New York : New American Library, 1964. アイン・ランド著, 藤森かよこ訳『利己主義という気概』ビジネス社, 2008.
- Capitalism : The Unknown Ideal*. New York : New American Library, 1967.
- The New Left : The Anti-Industrial Revolution*. New York : New American Library, 1971. 2nd. rev. ed., 1975.
- Philosophy : Who Needs It*. Bobbs-Merrill, 1982. New York : New American Library, 1984.
- The Ayn Rand Column*. New Milford : Second Renaissance Book, 1991.
- Letters of Ayn Rand*. Ed. Michael S. Berliner. New York. Plume, 1997.
- The Ayn Rand Reader*. Ed. Gary Hull and Leonard Peikoff. New York : Plume, 1999.
- Journals of Ayn Rand*. Ed. David Harriman. New York : Plume. 1999.
- Robin, Corey. *The Reactionary Mind : Conservatism from Edmund Burke to Sarah Palin*. Oxford, New York : Oxford University Press, 2011.
- Rossiter, Clinton. *Conservatism in America*. 1955. Cambridge : Harvard University, 1982. クリントン・ロシター著, アメリカ研究振興会訳『アメリカの保守主義---伝統と革新との交錯』, 有信堂, 1964.
- Sciabarra, Chris Matthew. *Ayn Rand, the Russian Radical*. University Park : Pennsylvania State University Press, 1995.
- Schneider, Gregory L., ed. *Conservatism in American since 1930*. New York : New York University Press. 2003.
- Szalay, Michael. *New Deal Modernism : American Literature and the Invention of the Welfare State*. Durham & London : Duke University Press, 2000.
- Watkins, T.H. *The Great Depression : America in the 1930s*. Boston : Little Brown Company, 1993.
- アメリカ学会訳編『原典アメリカ史---現代アメリカの形成 下』5巻 岩波書店, 1957年初版. 2006.
- 佐々木毅『現代アメリカの保守主義』岩波書店, 1984.
- 『アメリカの保守とリベラル』講談社, 1993.
- 副島隆彦『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』講談社, 1999.
- 高木尺八『米国政治史の研究』岩波書店, 1950.
- 『近代アメリカ政治史』岩波書店, 1957.
- 中澤信彦『イギリス保守主義の政治経済学』ミネルヴァ書房, 2009.
- 中谷義和『草創期のアメリカ政治学』ミネルヴァ書房, 2002.
- 中野秀一郎『アメリカの保守主義の復権---フーバー研究所をめぐる知識人』有斐閣, 1982.
- 野田裕久『保守主義とは何か』ナカニシヤ出版, 2010.
- 藤森かよこ「危険なフェミニストの冷戦ナラティヴ---アイン・ランドの『水源』」山下昇編著『冷戦とアメリカ文学---21世紀からの再検証』世界思想社, 2001, 100-25.
- 松尾弑之『アメリカの永久革命---共和党と民主党が生むダイナミズム』勉誠出版, 2004.

Early Ayn Rand and American Conservatism

Kayoko FUJIMORI

Much of the world calls what Americans now call conservatism “liberalism or neoliberalism.” All major American political parties support the republican and liberal ideals on which the country was founded in 1776, with an emphasis on liberty, pursuit of happiness, rule of law, opposition to aristocracy, and equal rights. However the pro-collectivistic, pro-communist and big government-oriented policies that Democrat Franklin Delano Roosevelt brought to the country during the Great Depression provoked some American people with conservative mind to oppose the New Deal. The conservative movement of the 1950s attempted to bring together beyond their divergent views, stressing the need for unity to prevent the spread of communist mind and totalitarianism based on communism.

Ayn Rand (1905-82) fled from her country contaminated with totalitarian oppression and social injustice, in pursuit of happiness and freedom in 1926. Her first major success as a writer came with *The Fountainhead* in 1943. This novel is striking, not only for its battle between the forces of conformity and the individualist, but also for its determined commitment to *laissez-faire* capitalism. While working in Hollywood, Rand extended her involvement with free-market and anti-communist activism. Besides she worked full time in a volunteer position for the 1940 Presidential campaign of Republican candidate.

Thus Ayn Rand enjoyed an intellectually fruitful but temporary intimacy with emerging American conservatism. Rand and American conservatives were common in their political philosophy emphasizing individual rights (including property rights) and regarding *laissez-faire* capitalism as the only lesser evil social system. She worked with conservatives on political projects, but disagreed with them over issues such as religion and ethics, which was revealed by her publication of *Atlas Shrugged* in 1957.

Keywords : conservatism, liberalism, New Deal, classical liberalism, individualism